

30年を振りかえって

中央病院臨床検査部 宮 達彦

平成8年2月1日、永年勤続の表彰式が行われ、阿部総長より表彰状を授与され、誠に感無量の思いでした。“光陰矢の如し”という諺の通り、本当に30年があったという間に過ぎてしまったと思う今日この頃です。

昭和40年大学院修了と同時に国立がんセンターに就職して現在に至っております。その当時生化学検査室では、オストワルドピペットで検体を吸い試験管に分注し、酵素を測定するときには恒温槽に入れ、片手でメスピペット、一方の手にストップウォッチを持ち、呈色液等の試薬を加えながら検査をしていた時代でした。それから数年後に、検査の自動化の幕開けとなり、当検査室でも自動分析機日立M-400やM-500の導入に乗り出していきました。その数年間、毎日のように夜遅くまで、ルーチンと平行しながら分析機の検討に取り組んだものでした。そうして現在の自動分析機日立736や735が生まれてきたと思います。当時、学会にはなかった自動化研究会で、仲間が使用経験等を発表していた記憶があります。

タイ国立がんセンター設立計画に対する技術協力が要請され、当センターの医師や技師が指導に行っていました。その時に何人かの人が肝炎に罹り、任期途中で交代するということがありました。その原因究明に乗りだし、昭和45年7月から調査団の一員として1ヶ月間バンコックに出張しいろいろな検査をしてきました。数年後に、タイのがんセンターから技師が当院の検査部に研修に来て交友を暖めたことなど、今ではなつかしい思い出の一つになっております。若いときに、日本の国を外から見つめ考えることが出来たことは、今の自分に非常に役に立つことがあります。

病院の中で検査の仕事はサービス部門の一つであると考えており、患者の検査結果を正確でより速く診療側に返すことが基本だと思っています。検査の用手法のときから、めざましい発展をとげた自動化に至るまで、至急の報告を電話で、そして手術室にはFAXで知らせるようになり、更にコンピューター導入により速報値をTRUMP画面で逐次検査結果が見られるようになっていったことはご存知のことと思います。

数年後に新棟が出来上り、21世紀に向けて新しいスタイルの検査室が出来るのではないかと期待をしている次第です。



前列左から池田・宮・榎本氏

「4ヶ月間の英国滞在を終えて」

東病院内視鏡部 藤井 隆広

British Councilならびにがん克服新10か年戦略研究事業による日英共同研究の一環として約4ヶ月間（昨年5月22日～9月15日）、英国Leeds市（Londonより約300km北部、列車で約2時間半）のGeneral Infirmary (LGI) に出向し、上部・



下部内視鏡検査を行って来ました。短期間ではありましたが、公私にわたり沢山の貴重な体験が出来、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。ここにいくつか私の感じたイギリスを紹介したいと思います。

ご存知のように英国は緑が多く赤いレンガ造りの家が立ち並び、街のあらゆる所にとっても広い芝生の公園があり、美しく環境も良い素晴らしい国です。私の子供達は家の近くの公園で野球やサッカーが思いっきり出来とても喜んでいました。周りの景色の美しさにも増して私達が魅了されたことは、英国の人々のさり気ない人との接し方でした。英国人（とくにLeedsの人）は親切で優しく好意的で、初めて出会った人でも必ず微笑で挨拶してくれます。欧米の人々が幼少の頃に親にしつけられることは、先ずSmileとThank youであると天声人語にもありましたが、実にそれが人々の生活に自然に入り込んで実行されているのです。また、英国の人々は交通のマナーがとても良く必ず道を譲ってくれます。高速道路は勿論どこに行っても無料で（ガソリンもセルフサービスで安く）、郊外の一般道路も広く交通渋滞もなく、日本にいる時のようなストレスを全く感じないため、週末にはいろいろな所に出かけることが出来ました。その中で私が選んだベスト3は、第1位Edinburgh(Scotland)、第2位Chester、第3位Cotswoldsです。EdinburghはPrinces St.から見上げるEdinburgh Castleがまるで映画でみる大画面のスクリーンのようで街全体が絵画のように統一された美しい所でした。Chesterは英国の古都で中世の面影があり、英国のレストランの中で唯一美味しさを感じた所でした。Cotswolds地方はEngland中央部に位置し最もEnglandらしい田舎と言われ、石組みや屋根葺きの古い村々が散在し、家並みも村の人々も穏やかで心が安らぎ、忘れていた何かを思い出させてくれるそんな所でした。とにかく、英国の良さを経験するのならLondonではなく郊外に足を延ばすべきです。今後、英国に行かれる予定の方は是非ご相談ください。

さて、本題のLGIの研究成果について報告します。近年、日本では表面陥凹型早期がん（IIC型）が大腸がんの初期病変として注目されるようになりましたが、欧米ではこの病変の報告は少なく日本人独自の腫瘍という認識がなされています。そこで、この病変が英国人に存在するか否かを明らかにするため、実際に211例の大腸内視鏡検査を行って来ました。その結果、表面型腫瘍33病変のうちIIC型早期がんを2病変発見治療しました。こ

これらの病変については、臨床病理カンファレンスの場で提示する機会を得て、英国における初めてのIIc型早期がんの実在を立証することが出来、臨床医、病理医双方より高い評価を頂きました。これまで英国人医師がこのようなIIc型早期がんを発見し得なかった要因としては、1)英国人医師達に表面型腫瘍が存在するという認識が欠けていたこと、又、微細な病変を描出するためには色素内視鏡が不可欠であるが、これに用いるインジゴカルミン色素が英国に無く、色素内視鏡の有用性も知られていなかったこと、2)大腸内視鏡検査における前処置も徹底しておらず早期大腸がん発見を行う以前の状態であること、3)英国人医師達の内視鏡検査手技が劣っていること、4)英国では炎症性腸疾患が日本に比べ圧倒的に多く、このための診断・治療学の研究が進んでいるため、ほとんど発見されない早期大腸がんよりも、むしろ頻繁に遭遇する炎症性腸疾患に興味が向かっていることなどが考えられました。以上のような日本との違いを計4回の講義からその認識が深められたものと思われます。

英国の地で私自身が実際に内視鏡検査を施行し得たことは、日本から持参する多くのスライドやビデオを使った説明よりも遙かに有意義であったように思われました。同時にわが国と英国では検査技術においてかなりの格差があり、わが国の検査レベルが高いことを身を持って体験し、また、英国人医師達も学ぶべきは学ぶといった姿勢であることから、この企画を継続し、内視鏡検査(挿入技術・治療技術)をはじめ内視鏡診断の実際についても直接的に実践の場で指導することで、彼らの検査技術の向上を図ることは十分可能であると思われました。このような交流の中で今後の様々な課題についても日英共同研究としてアプローチしていきたいと思っています。

最後に、同時期に渡英し、様々な局面でご指導頂いた中央病院外科の佐野先生に深謝いたします。

「がんについての市民公開講演会」の報告

中央病院薬剤部(がん医療サポートチーム) 坂本 治彦

本紙第115号(1995年10月発行)で、安達勇先生が「中央病院がん医療サポートチーム」の概要について紹介しました。サポートチームの発展的な活動の一端として、「がんについての市民公開講演会」を昨年11月4日(土曜日)に東京都勤労福祉会館ホールで開催しました。これは一般市民の方々への正しいがん医療情報の提供とがん全般についての系統的な教育を目的として、主催：がん研究振興財団、共催：中央病院で、サポートチームが中心となり行ったボランティア活動です。

講演会は垣添忠生中央病院長の開会の辞に始まり、続いて成毛紹夫中央病院副院長が「がん早期診断の重要性」、森山紀之東病院放射線部長が「がんの画像診断はどこまで進歩しているか」、という題でご講演を頂きました。成毛先生からは、日本におけるがんの罹患率と死亡の現状、がんの一次予防と二次予防、がん疾患の早期診断によるメリット、専門分野の肺がん領域における診断と治療の現状など幅広いお話を頂き、森山先生からは、最近の電子工学とコンピュータ解析によるがんの画像診断、がんの診断が質的に進歩している現状を普段見ることができない画像のスライドを交えて、解りやすく説明して頂きました。医学及び画像診断技術の進歩はがんの早期発見を可能とし、がんの早期診断が、がん医療上大変重要であることを理解して頂けたと思います。

会場では、時間を超過する程の熱心な質問と丁寧な回答が交わされ、約400人が参加した講演会も盛況のうちに終了しました。参加者からのアンケートでは、次回開催の希望も多く、よりよいがん医療環境を一般市民の方々、がん患者ならびに家族の方へ提供して行きたいと希望する我々の支援活動を多くの方に評価して頂いていること

あの人、あの頃

「薦田元運営部次長」

薦田繁雄さん(写真)が昨年4月10日に御逝去になったという記事がこのニュース110号に載っている。次長としてのお仕事は、1982年10月から1986年3月までである。

研究所ロビーに黒塗りの1本の柱がある。これは、もともと海軍軍医学校であった旧研究所3階と4階の間の階段の手すりを支えていた。この保存は薦田さんの発案である。薦田さんは創意工夫の人であり、よく所内を巡回して、職員の厚生問題にも御熱心だった。現食堂等の配置が完成したのも、その努力による所が大きい。職員の立場にたって、ことをよく考えて下さった。今、進行中の病院の新棟建設のきっかけを作るにはお互いに激論をしたが、穏和な大澤一郎運営部長がとりまとめて下さった。このニュースの発刊を始めたのも薦田さんであり、国立



がんセンターという下手くそな題字を私に書けと言われた。

薦田さんは、国立療養所東京病院事務部長へ栄転された。時々、お会いする機会があった。拙書「がんよ驕るなかれ」(日経サイエンス社刊)という本をお送りしたら、奥様よりお手紙をいただき、病氣静養中と伺った。大変喜んで下さった由である。御快復を祈っているうちに、御訃報をニュースで知り、御葬儀にも参らず失礼してしまった。奥様や御家族の方々にお詫びし、このニュースに、遅れてしまった追悼の気持ちを、当時の職員の一員として述べさせていただいた。

国立がんセンター創立の頃のことを最近のニュースに出ている。筑紫哲也氏によれば、最近の若い諸君にとって、ベトナム戦争以前は、すでに太古であるという。中世の頃、共に、センター発展のために戦った数多くの薦田さんのような戦士がいたことも、皆様に伝えたいと思う。その御冥福を祈る。今、きっと、立ち上がってきつつある新建築を、天上から見ていて下さるような気がする。

(東邦大学長 国立がんセンター名誉総長 杉村 隆)